

---

# 異世界の姫に、気弱で目つきの悪い少女が偶然召喚された様です

えすぽわーる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界の姫に、気弱で目つきの悪い少女が偶然召喚された様です

### 【Nコード】

N08520

### 【作者名】

えすぽわーる

### 【あらすじ】

容姿端麗《目つき悪い》成績優秀 運動神経抜群 何をやらしても優秀な気弱少女と、儚げな容姿とは裏腹に、腹黒お転婆姫の二人が、お互い惹かれ合い、周りを巻き込んで歩んでゆく物語

## 始まりは大体こいつのせい（前書き）

皆様の作品に感化され、頑張って書いてみました。

初めての作品なので、拙い所ばかりですが、それでも良いよという心の広い方は、読んで貰えると嬉しいです。

## 始まりは大体こいつのせい

「姫、何処に行ってしまったわれた！…ええい、見張りは何をしていた！」

城全体に響き渡るような怒声で、私の護衛兼友人のカルナが辺りにいる人に喚き散らす声が聞こえる。

ざまあみろ。この日の為に、何日もかけて練った計画は、今のところ順調だ。

毎日毎日、姫の嗜みだのと言われ。礼儀作法に、勉強、果ては楽器の演奏？ふざけんな。

朝起きて、日が沈むまでみっちり隙間もない程に予定が組まれ、遊ぶ暇もない。

忙しい癖に、退屈なのだ。逃げ出したくもなるでしょう？

まあ、そんな事はいい。この計画の目的地　　後宮にある古ぼけた書庫にある隠し部屋に走り向かう

何の目的で作られたのか？何故、誰もこの部屋が存在を知らないのか。疑問は尽きない。同時に、好奇心も尽きない

何故、隠されていたであろう？お父様や、お母様は知っているのだろうか。

…いや、知らないだろう。15年生きてきて、話題にすら上がらな

い。

それとなく、カルナや家臣達にも探りを入れてみたが、誰も書庫に近づかないのだ。知るわけがない。

昔から仕えている者達も知らない様子だった。そもそも、何故、この書庫に誰も近づかないのか？

特別な蔵書があるわけでもない。専門書や小説、絵本があるぐらいだ。

特別なことなど何一つない。唯の書庫。それだけで説明がつく。

私が隠し部屋を見つけたのも本当に偶然なのだ。

数日前、今日のように口煩い家臣達から逃げ出し城の中にある人の出入りが全くない薄暗い書庫に逃げ込んだ時だ。

埃が詰まった本棚の間を歩きつつ、目についた本を適当に読んでは戻す事を繰り返して歩いて時間を潰していた。

読み歩いて、部屋の隅にぽつんと、不自然に離れた場所にボロボロの本棚があるのが目に留まった。

他の本棚は、新品同様で、きちんと隣合わせに並べられているのに、壁にひとつだけ不自然に置いてある。

…何か、特別な蔵書を収めているのだろうか？と物色し始めた時に本を取り出した隙間から、微かな隙間から光が漏れているのに気がついた。

この部屋に窓など一切ない。ならば、この光はなんだろうか。

中を覗いて見ようとしても、よく見えない。もっとよく見たいが、本棚が邪魔。

ならば、と棚から本を全て取り出し、なるべく音を立てずに本棚をずらしていく。

漸く本棚をずらして、部屋の全貌を見ると、何もない。先程の光も何時の間にか無くなっていた。

埃が床の上に積もり、更に天井には無数の蜘蛛の巣。はつきりいつて、その時は心底がっかりした。

興奮が一気に冷めて、カルナ達をあまり怒らせるのもよくないと思い戻ろうと決め、やり場のない気持ちを抑え、最後に部屋をもう一度見渡した時に、部屋の異常性に気がついた。

床の埃が、部屋の中心だけ円を描くように積もっていないのだ。他の場所は積もりに積もっているのに。

よく見れば、埃が積もっていない円は、何かの魔方陣のようだった。うっすらと光を帯びている。

誰も近づかない書庫。その書庫の中にある、誰も知らない隠し部屋。そして、謎の魔方陣。

興味が尽きない。もっとよく調べたいが、何時までも隠れているとカルナや家臣達が怒る。

とりあえず、急いで紙とペンを持ってきて、魔方陣を写す。そして、数日かけて魔方陣を解読、今に至る。

魔方陣を解読していく内に、現在使われている魔法とは、全く違う術式が複雑に組み合わさっていることがわかった。

古い言葉が使われていたり、複雑な術式を解読するのは、流石の私一人では無理で、カルナを付き合わせた。

二人してあーでもないこーでもない、何とかわかった事といえば召喚の陣だったということだけ。魔法の中でも、割とポピュラーとはいえ、何が呼び出されるのか結果を知りたかった。

カルナと二人でも、完璧に解読したわけではないのだ。しかも、現在使われている魔法とは、全く違う術式。術式が少しでも違えば、結果も違ってくるのだ。それが、全く違う術式ともなれば楽しみみでしようがない。

逸る気持ちを抑え、誰にも見つからずに隠し部屋にたどり着く。

魔方陣の中心に立ち、自分の手のひらを短剣で刺す。痛みに顔をしかめるが、我慢して次の段階へ移る。

手のひらから滴る血を、足元に垂らしながら目を閉じ、陣を発動させる為に朗々と詠う。

滴る血は、床に落ち陣をなぞる様に蠢く。

言葉を紡ぐ度、陣が光を帯びる。鼓動をするように、点滅を繰り返す溢れる光は、不思議な暖かみを持って部屋を、そして、離れ宮全体

を覆っていく。

額からは、汗が流れ出て、光に押しつぶされそうになりながらも詠い続ける。

「  
我が呼び声に答え、来たれ！」

最後に叫んだ瞬間、凄まじい音が周囲に響き渡り、光が爆発した。衝撃で、埃が宙を舞い、爆発の衝撃で書庫が大変なことになっていたが、この現象を引き起こした本人はケロっとしている。

「けほつけほ…せ、成功？ふ、ふふふ！さあ、出ていらっしやい！」

視界を覆う煙と埃に咽ながら、何かが動く影が見える。何が出てきたのだろうか？

早く、早く視界よ晴れてくれ。既に爆発音を聞きつけて、城中の人が此処にやってくる音が聞こえる。

内心、やばいなー逃げちゃおっかな？とか思っていたりするが数日かけてここまで頑張ったのだ。結果を見たい。

…後始末はカルナに任せよう、うん。

ゆっくりと、こちらに向かって歩いてくる影。私は両手を広げて歓迎のポーズを取りながら叫ぶ



「さあ、出て来なさい！早くしなければ私が怒られ

…え？」

「けほっ…けほっ……………」

×

…?!」

スラリとした体躯に、夜の闇を映した様な、膝の辺りまで無造作に伸ばされた髪

つり目がちな大きい瞳は、空の色。整った鼻筋と、桜色の唇

同性の私ですら、見惚れる様な美しさを持った少女が、意味不明な言葉を呟きながら現れた。

始まりは大体こいつのせい（後書き）

読んでくださって、ありがとうございます。  
若干誤字や文を修正しました。

些細な勘違い

「けほっ……けほっ……」  
「？」  
「×」  
「……？」  
「！」

陣を起動した時に発生した爆発の余波で、埃と煙が舞う空間の中から、咳き込みながらも

聞きなれない言葉を呟き、きよろきよろと辺りを確認している。

…何だ、この娘

混乱する心を抑えつつ、同じく混乱しているであろう相手を見る。

見慣れない服装だ。多少、埃がついて汚れてしまっているが、上質な布を使われているであろう事が

一目でわかる。シミひとつない白い肌も相まって、大貴族の令嬢だと公言しても、通用しそうである。

無造作に伸ばされた様な髪だが、癖も無く真っ直ぐに伸びて、余程念入りに手入れされていることがわかる。

平民という事はないだろう。着ている服は奇妙だが、そこらの町の住民では、到底扱えそうにない布を使っている。

異国に住む貴族  
いだろうか？

その中でも、身分の高い位置にいるのではな

だとしたら、これは国際問題にもなりうる。そこまで考えて、自分の顔から血の気が引いていく

ヤバイ、とてつもなくヤバイ…。

偶然見つけた魔方陣を、興味本位で発動させたらあなたの国の令嬢が出てきちゃった。ごめんね　じゃ済まされない。

自分の心の中で警告をかき鳴らして、状況を解決するために思考に耽る。そして、思考に潜るのと、騒ぎを聞きつけた兵士達や、護衛件友人であるカルナ達が、見るも無残な有様になった、書庫の中に足を踏み入れたのは、全くの同時だった。

「姫！何処に行きましたか！？…ウィクトーリア！出てきなさい、もう！」

ちょっと目を離せば、霞のように消える姫　　ウィクトーリアの護衛件友人という名の苦労人のカルナは、思わず素で叫ぶ。

今回も、真面目にしていたかと思って、油断してしまった。

喉が渴いた。という可愛らしい声と、笑顔につい、つい騙されてた。どこからどう見ても儚げな美姫としか見えないウィクトーリアだが、中身は例えるなら、暴走する馬車といった所だろうか。

好奇心旺盛で、自分が楽しいと思ったことには全力だが、興味の無い事になると途端に駄目になる。

頭の回転も速く、今日のように静かにしていると油断させた隙に、脱走など数えるのも馬鹿らしいくらいだ。

それでも、その笑顔に皆が騙されている。手に負えないとは、彼女の為に在る様な言葉だ。

辺りにいた、兵士やメイド等に姫を知らないか？と尋ねても皆が首を振るのみ。

こんな事で、その才能を惜しみなく発揮するのはどうなのだろうか……。

深い、深い疲れの混じった溜息を吐きながら、しらみ潰しに搜索していた時に、不意に爆発音と、建物全体の揺れを感じた。

「何、今の音は！？状況の確認を急げ！……その貴方、念の為に他の兵を集めてください。それ以外の兵は、私と一緒に来なさい。」

素早く周りの人間に指示を出し、音がした方向に駆け出す。またウイクトーリアが何かやかしたのだろうと

いうのが、この音を聞いた者一同の見解だ。……妙なところで信用がある姫だ。

音がした位置は、あの埃臭い、人の出入りが少ない書庫だろう。

尻拭いをさせられる事は、既に確定している。キリキリと痛む頭を振り、問題児を捕獲することに全力を出す。

使用人達が行きかう廊下を走り続け、長い階段を飛び降りるような速度で駆け降り続ける。

目的地の前にたどり着き、怒りに燃える声で辺りに叫ぶ。

「ウィクトーリア！今度は、何をやったの！？後始末させられる身にもなりなさい！早く出てこないと、陛下達にご報告するわよ！」

ついてきた兵士達に、入り口を固めさせて逃げられないようにする。そして、辺りを注意深く観察しながら、悲惨な状態にある書庫に入る。本棚は全て倒れ、倒れた拍子に砕かれた木片と本があたり一面に散乱して、足の踏み場もない。

静かに、此処を掃除することになる自分達の未来に心の中で涙を流しつつ、入り口と反対側にある壁に開いた穴から小柄な、癖のある金髪の少女が目に入る。

・・・何をやっているんだろう。あんな場所に穴など開いていただろうか？

部屋の全貌は、この位置では確認出来ない。かろうじて、ウィクトーリアの後姿しか見えない。

いつもなら、部屋に入った瞬間にこちらに気がついて逃げ出すはずのウィクトーリアも、こちらに気がつくことなく俯いたまま思案している様だ。何か、様子がおかしい……？妙に焦っている気がする。身体も小刻みに震えている。

暫らく、様子を見る事してみよう。こんなに取り乱した様子を見るのは、本当に久しぶりだ。

どうやら、ウィクトーリア以外にも人がいる気配がする。

こんな場所で、何をやっているのか確認してからでも遅くはないだろう。

決して、焦ってるウィクトーリアが可愛くて、もっと見ていたいという事はない。多分。

「けほっ…けほっ……………？何、何がおこったの…？！」

わけがわからない。私は、何時もの様に学校から帰って、自室で寝ていた筈だ。

つい、うとうととしてしまったのは覚えている。だが、激しい浮遊感と光、爆発音が響き渡り、飛び起きた。

飛び起きたはいいが、宙を漂う埃と煙が襲い掛かってくる。自分の部屋にこんな埃だらけだったか…？

埃と煙の包囲網をやつとの思いで抜け出し、新鮮な空気を吸い込む。そして、閉じた瞳を開けた瞬間、視界に飛び込んできたのは

ぱかんと口を開けてこちらを除き見る、小柄な少女だった。

癖のある髪は腰元まで伸ばされ、まるで最高級の金糸を連想させる。

くりくりとした大きな瞳は、深い緑。私の行動を、全て見逃すまいと忙しなく動く姿は、小動物を連想させる。

小さい、少し高めの鼻筋、小さい形の良い薄紅色の唇が、キュッと真横に結ばれている。

着ている服は、上品な装飾が施された可愛らしいドレス。素人の私が見ても、高級なものだとわかる代物。

物静かな、儂げな印象を感じさせるその少女は、私が見つめると、ビクリとその身体を揺らした。

あれ、私何かしたのだろうか…？顔色がもの凄く悪い。顔面蒼白という言葉がぴったりだ。

パクパクと、金魚のように口を開けては閉じを繰り返している。

…大丈夫だろうか？この子。いきなり倒れてしまわないだろうか。

内心びりまくりだが、健気に目の前の少女を怯えさせまいと、ニコリと笑いかける。

ビクッ

笑顔を向けると、何故か少女の身体が跳ねた。そして、一歩後ろに下がる。

「……………ッ！」



目尻には、大粒の涙が、今にも零れ落ちそうになっている。

不味い、不味いぞこれは。小さな女の子を泣かせる女子高生（笑）とか、最悪じゃないか。

敵意がないように笑顔向け、少女に一步近づく。

ビクリッ

私が一步近づいたら、今度は2歩下がった女の子。更に焦りは募る。私を見つめながら更に下がる。下がる。下がる。顔はもう、泣く一步手前。涙に潤んだ上目遣いで私を警戒する。

「え、ちょ、ななな何で泣きそうなの！？ま、待って！逃げないで！そんな目で見ないで〜！」

彼女は知らない。自分は人の良い笑顔を浮かべると思い込んでいるが、びびりまくって引き攣った笑顔になっている事を。

その引き攣った笑顔は、持ち前の目つきの悪さと合わさり、絶対零度の微笑になっている事を。

「~~~~~ツ！~~~~~ツ！？」

そして、その絶対零度の微笑を勘違いして、聞きなれない言葉を叫びながら逃げ出す少女。

更に、逃げ出した少女の事を、同じく聞きなれない言葉を叫びながら、いきなり物陰から飛び出し追いかける騎士のような格好をした少女。

取り残されたのは、何がおきたのかわからずぽかんと口を開けた目つきの悪い少女一人だけだった。

### 些細な勘違い（後書き）

ここまで読んでくださって、ありがとうございます。

初投稿&amp;初作品ということも相まって、緊張の連続です。数人の方が、お気に入りに登録してくれて、もの凄く嬉しいです。本当に、ありがとうございます。

若干、脱字や文を修正しました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0852o/>

---

異世界の姫に、気弱で目つきの悪い少女が偶然召喚された様です

2010年10月10日10時56分発行